



# FIAT LUX

EST.1920  
100th Anniversary  
—光あれ

第17号 2020.4

=CONTENTS =

- ◇100年という時間 (吉田 昌志)
- ◇図書館が向かう先 (横山 紀子)
- ◇情報デジタル化黎明期の思い出 (今井 章子)
- ◇2019～2020年度図書館事業
- ◇2020年度図書館年間スケジュール

## 100年という時間



副学長  
図書館長  
**吉田 昌志**  
YOSHIDA Masashi

今年には本学創立100周年の記念すべき年。だからやはりこれにちなむ話題を提供してみよう。

私にとって「100年」という言葉で最も印象的なのは、「こんな夢を見た。」と始まる夏目漱石「夢十夜」(明治41年7月)の「第一夜」である。「百年、私の墓の傍に坐つて待つてみて下さい。屹度逢ひに来ますから」と言い残して死んだ女を、真珠貝で掘った穴へ埋め、その傍らで来る日も来る日も待つ「自分」。「女に欺されたのではなからうか」と思い出した刹那、地中から青い茎が伸びはじめ、「真白な百合」の花が開く。その百合の花びらに接吻した時、自分は初めて「百年はもう来てゐたんだな」と心づくのであった。

この「百年」がクロニクルな時間で無いことはむろんだが、「夢」の解釈は多様で、研究者の間でも明確な答えが出ていない難解な語句なのだ。

「夢十夜」の「百年」はひとまず措くとして、図書館においてならば、わたしたちが「100年」に出会うのはそれほど難しくない。

「資料・情報検索」のうちの「新聞データベース」で「読売新聞」の「ヨミダス歴史館」または「朝日新聞」の「聞蔵Ⅱビジュアル」を使えば、容易に「100年」前の現場に立ち会うことができるのだ。

創立者人見圓吉先生は、明治42年から大正3年までの6年間「読売新聞」に在籍していた縁もあるので、「ヨミダス歴史館」へ「日本女子高等学院」を入力すると、今から100年前、大正9年(1920)8月31日の記事が見つかる。この記事は『昭和女子大学七十年史』(平成2年5月)や『近代文学研究叢書』別巻(平成12年10月)の人見東明の巻にも言及されていないから、全文を引用してみよう。

◇日本女子高等学院 小石川区西江戸川町二一の同校にては女学校卒業程度の夜学部英語科、文学科及び英語初等科共九月十一日より始業開講すべく目下生徒募集中の由

「よもうり婦人欄」に載ったこの記事が、メディアに登場した昭和女子大学の始発点である。なぜ8月末に載ったかといえ、当時の高等教育機関の新学期が4月ではなく9月だったことによる。

しかし、検索した情報で満足せず、さらに同じ紙面を注意して見ると「入学応募者が十倍に上る各私立大学」の見出しで、「早稲田、明治、中央、日本、慶応等各私立大学」の応募の盛況ぶりが報じられている。

この私学の入学応募者の急増が、女子の高等教育の学校を開設しようとしていた人見先生の背中を押す力になったのではないかと推測が可能になるだろう。

100年前の本学創立の必然性は、こんな小さな記事からも導き出すことができるのだ。

図書館でのこうした発見があるたび、私はあの東明学林の食堂に掲げられた扁額の「無盡蔵」という言葉を思い起すのである。



創立者人見圓吉先生 大正10(1921)年



「夢十夜」収録の「四篇」夏目漱石著 春陽堂 明治43(1910)年

# 図書館が向かう先

文学研究科長  
横山 紀子

先日、大学院生が使うコピー機の管理をしている部署からの報告を聞いて驚いた。学生たちが取るコピーの枚数がこの数年で激減しているというのだ。これは学生たちが文献を読まなくなったということではなく、インターネットで多くの文献が手に入るので、学生たちは紙の本や学術誌からのコピーではなく、ウェブから直接印刷しているらしい。思い返してみれば、私自身も、かつてに比べれば図書館に足を運び、書庫から本や雑誌を取り出す機会が少なくなった。旧世代に属する私は、紙の本の実感が捨てがたく、電子ブックも長い間敬遠していたが、何かの折に半ばやむを得ず使ってみたところその利便性には抗いがたいものもあると感じる。若い世代のことは推して知るべしであろう。

さて、こうした時代の流れの中で、図書館はどこへ向かうのだろうか。考えるヒントを与えてくれたのは、「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」という映画である。このドキュメンタリー映画は、ニューヨーク公共図書館（本館と92館に渡る分館）が提供するサービスの現場やスタッフの舞台裏をナレーションなしに淡々と映し出す。図書の借出しはもちろんのこととして、市民向けの講義やワークショップ、コンサート、詩の朗読会、絵本の読み聞かせ会、下校後の子どもたちの勉強の手伝い、移民向けの英語教室……市民の知性・教養に関わるものなら何も排除しないという姿勢が見える。図書館運営に携わるスタッフの白熱した議論も映し出される。議論の内容は、運営費を助成するニューヨーク市の意向をどこまで取り入れるべきなのか、ベストセラーの購入を優先すべきか否か、紙の本の未来はどうか、さらには、寒い冬に図書館で暖をとるホームレスを追い立てるべきか否かまで。観光拠点でもある本館の美しい建物や内装はもちろんのこと、司書やスタッフのきびきびとしたプロフェッショナルぶりが美しく、3時間を越える長編だが、飽きることなく楽しむことができた。

この映画が見せてくれた図書館の向かう道は、本を読んだり借りたりする場を超えて、人が人とつながる場へと向かうものであったように思う。そのつながりの核にあるのは、たとえば移民の子どもたちを支援するボランティアの志やホームレスに寄せる人間性に垣間見える「知」なのではないだろうか。これまでの図書館の主な役割が蔵書に詰まったソフトを提供することであったとすれば、そのソフトが手元のPCやスマホで入手可能になった現在、求められるのはもっとリアルで実感を伴う人と人の交流かもしれない。大学図書館ではどんな交流が図れるのか、みなさまと一緒に知恵を絞りたい。



ニューヨーク公共図書館本館 外観



ニューヨーク公共図書館 読書室ローズルーム

『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』 © 2017 EX LIBRIS Films LLC - All Rights Reserved  
配給：ミモザフィルムズ/ムヴィオラ 2019年5月18日(土)より岩波ホールほか全国順次公開

# 情報デジタル化黎明期の思い出

ビジネスデザイン学科長  
今井 章子

みなさんは「日経テレコン」や「聞蔵」などの新聞記事データベース（以下DB）を利用したことがあるだろうか。何十年分のすべての記事から瞬時に目当ての記事を引き当てるDB。その開発当初の様子を少しご紹介したい。

私は1987年に朝日新聞DBの編集者になった。出勤初日の部長の言葉は今でも忘れられない。「今日からお茶くみをする必要はまったくありません。この端末があなたの鉛筆であり消しゴムです。どんどん使いこなしてください」。当時、パソコンの世帯普及率はたった11.7%。一方、新聞紙面の制作はコンピューター化され、朝夕刊が出来ると同時に膨大な量のデジタルデータが誕生していた。米国ではこれを利用して1本1本の記事をキーワードを使って自動検索する「DBサービス」がすでに商用提供されており、日本では日本経済新聞社について朝日新聞社が商用化に取り組み始めた頃であった。編集者一人ひとりにネットワークPCが1台ずつ確保され、しかも社内の精鋭エンジニアたちが常にDB用プログラムを改良し続けるという開発環境は、当時のイノベーションの最前線と言ってよいだろう。

新聞記事を大学や図書館で検索してもらうにはネットワーク配信が不可欠だが、当時は通信回線のスピードが遅く、画像や動画は当然無理、全角（2バイト）で表す日本語すら「重い」データだと言われていた。そのような中で検索速度と精度を上げるには、記事にタグをつけたり（5つまでという制限もあった）、見出しを短くしたり、逆に「総理」という言葉に「竹下」と追加するなどの人手をかける必要があり、これらは「根気強く、正確な仕事が求められるので女性に向いている」ということで、編集者は全員大卒女性を公募していた。今考えると「逆差別」といわれそうだが、当時は雇用均等法が施行されてわずか2年目。まだまだ大卒女性が能力を活かせる職場は限られていた。

「米国では研究用回線が大学に開放され、インターネットという高速情報網が世界中に広がっている」と聞いたのは90年頃のこと。高速ネットに載せる日本語情報をいかに大量に正確にデジタル化するか、日本でも研究機関がしのぎを削っていた。例えば、日本IBMやNTTの研究所では、新聞で使われる自然な日本語の文章を自動解析させるため、言語学者と情報技術者が組んでチョムスキーの理論や各社独自の分節法を活用してかなりの精度を再現できていた。これらの技術は現在、自動音声読み上げや、自動翻訳の世界で標準的に使われている。

その後私は英文出版社にうつり、紙の手触りや文字の美しさを大事にする書籍編集を手掛けつつ、外務省や長野オリンピックなどの英文ウェブサイト制作にも携わるようになった。図書館はデジタルであれアナログであれ、あらゆる編集者・開発者たちの「作品」の宝庫でもある。今度、図書館を使うときにはぜひその情報を「作った人々」のことに思いを寄せてみてほしい。



朝日新聞記事検索データベース  
「聞蔵Ⅱビジュアル」検索画面  
©朝日新聞社



新聞記事検索データベース専用端末  
(図書館3Fフリーラーニングスクエア)

# 2019～2020年度図書館事業

2019年度から2020年度にかけての図書館の主な事業をご紹介します。

## ● 2019年度新収貴重資料

	コレクション名	資料名	著者名	出版者	出版年
1		源氏物語絵貼交屏風	-	[出版者不明]	[1---]
2		島田雪湖筆 舞楽図巻	島田雪湖筆	[出版者不明]	[18--]
3		チャールズ・ディケンズ旧蔵「The Holy Bible (欽定訳聖書)」	-	Stationers	1649
4	近代文庫	泉鏡花 印譜	-	[出版者不明]	[出版年不明]
5	近代文庫	泉鏡花 初版本 33点 (他著者本含む)	泉鏡花著	-	[1---]
6	近代文庫	泉鏡花・与謝野晶子他短冊 10枚貼込屏風	泉鏡花、与謝野晶子ほか著	[出版者不明]	[出版年不明]
7	近代文庫	尾崎紅葉書簡額	尾崎紅葉著	[出版者不明]	1903
8	近代文庫	尾崎紅葉貼込二曲屏風	尾崎紅葉著	[出版者不明]	[1---]
9	近代文庫	尾崎紅葉 印譜	-	[出版者不明]	[出版年不明]
10	近代文庫	里見弴 書簡・葉書 40点	里見弴著	[出版者不明]	[1---]
11	近代文庫	山宮允宛 書簡・葉書 103点	-	[出版者不明]	[18--]
12	近代文庫	釈迦八相倭文庫 (1～55 編合本 27冊)	万亭応賀作 歌川豊国等画	上州屋重蔵	1846-
13	近代文庫	与謝野晶子書簡幅 [三宅克己宛]	与謝野晶子著	[出版者不明]	[1---]
14	児童図書	The Nursery "Alice" (子供部屋のアリス) 初版本	ルイス・キャロル著 ジョン・テニエル絵	Macmillan	1889



源氏物語絵貼交屏風



尾崎紅葉貼込二曲屏風



チャールズ・ディケンズ旧蔵  
「The Holy Bible (欽定訳聖書)」



## ● デジタル版図録『図書館70年の歩み —図書館開設70周年・近代文庫創設60周年記念—』発行

図書館は昭和23 (1948) 年11月に開設され、平成30 (2018) 年に70年を迎えた。この70年の歩みを振り返り、2018年度に行った図書館特別展 (全6回) にて出陳したコレクション資料や、図書館の歴史、2018年10月に開催した図書館開設70周年・近代文庫創設60周年記念式・祝賀会の様子をまとめたデジタル版図録を2020年3月に発行し、公開した。是非ご覧いただきたい。

## ● 戸田基文庫について



戸田文庫は、先生の研究分野が色濃く反映された、イギリス文学関連資料の宝庫である。2018年9月、ご遺族から戸田基名誉教授の愛蔵書のご恵贈により、2019年に特殊文庫として設立した。英文学関連、美術関連の図書3,472冊、雑誌72冊を収蔵している。

戸田先生は、1987年に本学大学院英米文学専攻の教授に着任され、2004年度まで本学で教鞭をとられた。授業ではイギリス文化研究やジェイムズ・ジョイス文学演習、イギリス・ロマン派の詩やモダニズム文学、イギリス絵画と文学、イギリス・ルネッサンスの詩などを担当された。

また、戸田先生は、日本英文学会、イギリス・ロマン派学会、日本T.S.エリオット協会に所属され、1998年には日本ジェイムズ・ジョイス協会会長に就任し、活躍されていた。

## ● 2019年度昭和女子大学デジタルアーカイブ公開資料



図書館開設70周年、近代文庫創設60周年記念事業の「昭和女子大学図書館デジタルアーカイブ」(2018年11月3日公開)に、創立者人見圓吉が使用していた机等の博物資料や自筆資料、2018年度の図書館特別展で展示した資料を追加公開した。

今後も教員や学生の研究活動推進のために、これまで収集してきた貴重資料、近代文庫などを含む特殊コレクションのデジタル化に取り組み、公開をしていく。

## ● 2020年 昭和女子大学創立100周年を記念して



左から楠郎先生、緑先生、圓吉先生、保坂先生

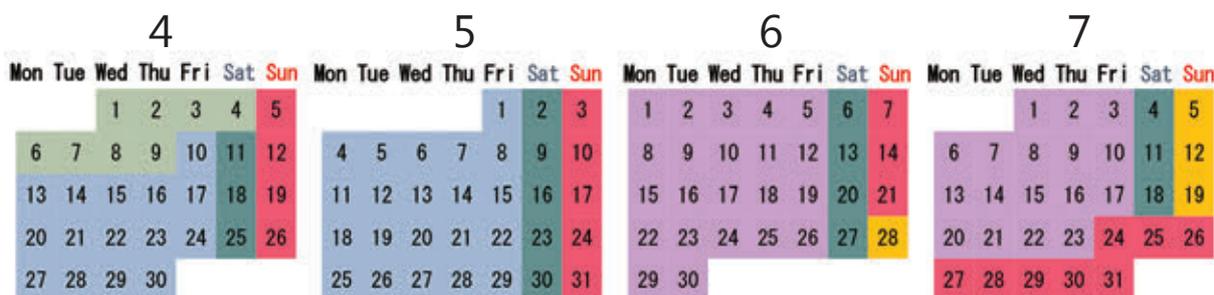
昭和女子大学創立100周年にあたり、創立者及び理事等のご遺業とご遺徳を記念して4種の文庫“人見東明文庫”、“人見楠郎<sup>くすお</sup>文庫”、“保坂都文庫”、“松本昭<sup>きゅう</sup>文庫”を図書館に設置する。昭和学園の発展の過程で、先生方が教育や調査研究のために収集してこられ、これからの時代にも活用できる教育的、学術的価値の高い資料である。人見圓吉先生(初代理事長・図書館長)は、詩人・人見東明として活躍され、人見緑先生、松本越<sup>きゅう</sup>先生らと発足した文化懇談会を組織化して大正9(1920)年に日本女子高等学院を創設し、女子教育に尽力してこられた。人見楠郎先生(第2代理事長・第5代学長)は、日本の私学教育を牽引し、振興に寄与した。保坂都先生(名誉理事・名誉教授・第2代図書館長)は、昭和女子大学の前身日本女子高等学院を卒業後、圓吉先生、楠郎先生と共に昭和学園教育の発展に寄与された。松本昭先生(名誉教授)は、松本越先生のご子息で日本ミイラ研究の第一人者である。圓吉先生の著書『東明詩集』(小林寅次,1972年)ほか、先生方からのご恵贈資料は、創立100周年記念特別展や蔵書検索にて公開する。

5月から翌年2月にかけて開催する記念特別展では、左記の新収貴重資料と特殊文庫資料を中心に、収蔵品と2019年11月に文化功労者として顕彰された馬場あき子氏(卒業生)の著書などを展覧する。特に初出陳する優美な「源氏物語絵貼足屏風」や泉鏡花・与謝野晶子らの和歌の短冊貼足屏風、チャールズ・ディケンズ旧蔵『The Holy Bible』(1694年刊)などはぜひご覧いただきたい。併せて、「昭和女子大学図書館デジタルアーカイブ」では、昭和女子大学の歴史、本学関係資料のほか、デジタル画像で閲覧できる資料を増やす予定(11月頃)である。

# 2020年度 図書館年間スケジュール

最新の情報は図書館ホームページ参照。

開館時間 ■8:45～21:30 ■8:45～20:00 ■8:45～18:00 ■8:45～17:00 ■9:00～16:00 ■休館

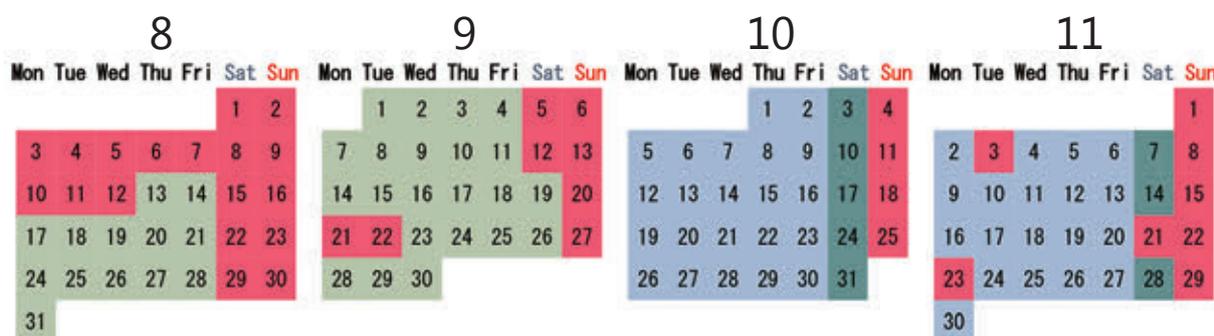


4/3～9 オリエンテーション  
4/10～7/2 図書館ツアー、  
授業・ゼミガイダンス

5/1～7/2 情報検索ガイダンス  
(個人対象)

6/28 日曜特別開館

7/5・12・19 日曜特別開館  
7/3～16 試験期1冊一夜貸  
7/20～9/19 夏季長期貸出



9/15 ブックハンティング (予定)

10/1～12/18 図書館ツアー、  
情報検索ガイダンス (個人対象)、  
授業・ゼミガイダンス

11/21～22 秋桜祭



12/6・13・20 日曜特別開館

1/10 日曜特別開館  
1/8～1/28 試験期1冊一夜貸  
1/29～3/18 春季長期貸出

## ● 2020年度貴重資料展示予定 (変更する場合があります)

展示内容	展示期間
図書館コレクション展 一昭和学園教育の礎一	2020/3/3 (火)～2020/5/9 (土)
100周年記念特別展・新収資料展I	2020/5/13 (水)～2020/7/21 (火)
100周年記念特別展・新収資料展II-1	2020/9/25 (金)～2020/10/22 (木)
100周年記念特別展・新収資料展II-2	2020/10/28 (水)～2020/11/25 (水)
100周年記念特別展・新収資料展II-1	2020/11/30 (月)～2020/12/24 (木)
100周年記念特別展・新収資料展III	2021/1/13 (水)～2021/2/27 (土)
図書館コレクション展 一昭和学園教育の礎一	2021/3/9 (火)～2021/5/8 (土)